

紀 要

第 9 号

1 9 9 6 . 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

目 次

序

‘廃棄’を考えるー貝塚出土資料の検討にあたっての試論ー〔鈴木康二〕	1
粟津湖底遺跡第3貝塚の貝類採取活動ーセタシジミの成長速度と年齢構成ー〔稲葉正子〕	11
大津市粟津湖底遺跡出土の錘〔瀬口眞司〕	16
篋状木製品の用途について〔松澤 修〕	25
縄文晩期土器棺墓の調査方法についてー近畿地方の場合ー〔中村健二〕	38
近江における弥生社会の理解にむけてーその方法と課題ー〔大崎康文〕	42
長浜市域における弥生時代の石器ー今川東遺跡出土石器を中心にー〔稲葉隆宣〕	51
石組みの煙道を持つカマドー古代の暖房施設試論ー〔上垣幸徳・松室孝樹〕	57
集落遺跡出土の鉄製品についての研究ノート〔田井中洋介〕	79
近江へのアプローチ・その3ー野洲・栗太をフィールドにー〔近江歴史クラブ〕	85
1. 野洲川流域の前・中期古墳について〔鈴木桃代〕	89
2. 栗太・野洲における後期古墳の類型的把握 ー古墳時代システム論への墓制的アプローチー〔細川修平〕	94
3. 集落遺跡から見た古墳時代の特質ー古墳時代システム論への予察ー〔細川修平〕	102
4. 栗太・野洲郡における掘立柱建物データの抽出と分類〔神保忠宏〕	110
5. 近江国の古代駅路と官衙遺跡について〔内田保之〕	122
6. 古代における琵琶湖の湖上交通についての予察〔畑中英二〕	130
7. 田原道をめぐる二つの地域〔重岡 卓〕	136
8. 近江における玉造りをめぐって〔中村智孝〕	149
9. 栗太・野洲郡における古代の土器様相〔畑中英二〕	157
10. 鉄鉱石の採掘地と製鉄遺跡の関係についての試論 ー滋賀県の事例を中心にー〔大道和人〕	164
栗太・野洲郡のまとめ	179
大津北郊白鳳寺院の造営計画（その1）〔仲川 靖〕	185
古代遺跡と出土文字資料〔濱 修〕	200
石山国分遺跡出土瓦の覚書〔平井美典〕	208
巡礼者の宿ー鴨田遺跡出土の巡礼札よりー〔重田 勉〕	215
焼物二話〔稲垣正宏〕	220
蒲生稲寸氏についてー近江古代豪族ノート5ー〔大橋信弥〕	224
律令神話に於ける農業神について〔造酒 豊〕	233

日本古代の対外関係史の一様相

-日本古代史研究ノートあるいは覚書その2-〔芝池信幸〕	238
遺跡の撮影〔阿刀弘史〕	243
新聞報道にみる文化財保護25年-新聞記事データベースの作成と利用-〔中川正人〕	252

石山国分遺跡出土瓦の覚書

平井美典

石山国分遺跡の所在する大津市国分・北大路・光が丘町・烏居川町・田辺町にかけての台地は、古くから古瓦が出土することで知られ、近江国分寺の跡地とされていた土地である。⁽¹⁾しかし、当地所在寺院の具体像については、ほとんど明らかにされてはいない。このことは当地において発掘調査があまり行われてこなかったことによる。瀬田川東岸の近江国府関連遺跡群と比べるとその調査頻度があまりにも低いと言わざるを得ない。ただ、こうしたなかで、過去に実施された数次の発掘調査⁽²⁾の成果や、当地で採集された瓦類を駆使した西田弘氏⁽³⁾や林博通氏⁽⁴⁾による考古学的研究も近年発表されてきているところである。現在、公にされている石山国分遺跡に関わる考古資料に基づく研究は、これらの先学によって既に尽くされている感があるけれども、小文は出土瓦のあり方から、現時点においての本遺跡に対する筆者のイメージを記しておくものである。

石山国分遺跡では発掘調査出土品および採集資料から、多種類の軒瓦が出土することがわかっている。第1図はこれらを種類別に一覧し、筆者覚えの型式アルファベットを付したもので、各型式の概要は以下のとおりである。

軒丸瓦

L型式 蓮子は1+5+9。内区は複弁8葉蓮華文。外区は珠文帯で飾られる。外縁は斜縁につくり、線鋸歯文が廻る。数種の範があり、藤原宮6278A・D・D型式と同範の可能性が考えられている。⁽⁵⁾

K型式 中房は小さく、蓮子は1+6。内区は単弁12葉蓮華文。蓮弁は線的な表現で、外区には珠文が廻る。外縁は斜縁で線鋸歯文を施す。

K2型式 K型式と同様のモチーフの大型品。蓮子が1+4でK型式とは異なる。

A1型式 外区に右回りの雲文が施される。

A4型式 蓮子は1+6。内区は単弁12葉蓮華文。外区には左回りの飛雲を8個配す。

D型式 蓮子は1+4。内区は彫りの浅い単弁8葉蓮華文。外区に珠文を施す。

E3型式 小さい中房内いっばいに突起状の蓮子が1個配される。内区は棒状の細い単弁16葉蓮華文。外区は素文。

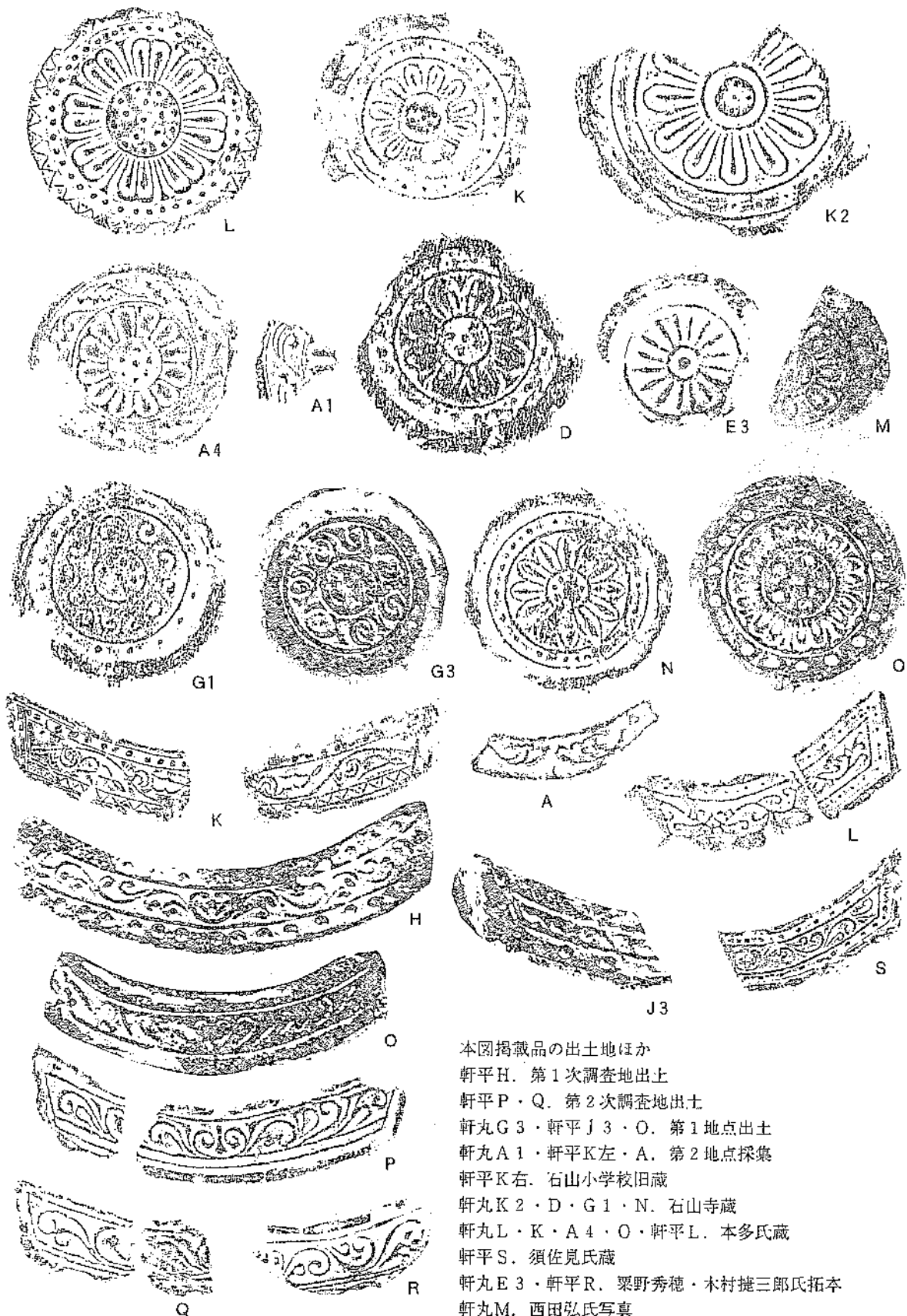
M型式 蓮子は1+4。内区は単弁8葉蓮華文。外区に珠文を施す。

G1型式 蓮子は1+4。内区は反転する7個の唐草を左回りに配す。外区には珠文を施す。

G3型式 蓮子は1+6。内区には巻き込みの強い唐草を7個配す。外区には珠文を施す。

N型式 蓮子は1+8か。内区は弁先端が尖り気味の単弁12葉蓮華文。外区には珠文が施される。平城宮6133型式の系譜を引くものと考えられる。

O型式 蓮子は1+5。内区は弁の短い複弁8葉蓮華文。外区には大振りの珠文が17個ある。



本図掲載品の出土地ほか
 軒平H. 第1次調査地出土
 軒平P・Q. 第2次調査地出土
 軒丸G3・軒平J3・O. 第1地点出土
 軒丸A1・軒平K左・A. 第2地点採集
 軒平K右. 石山小学校旧蔵
 軒丸K2・D・G1・N. 石山寺蔵
 軒丸L・K・A4・O・軒平L. 本多氏蔵
 軒平S. 須佐見氏蔵
 軒丸E3・軒平R. 栗野秀穂・木村捷三郎氏拓本
 軒丸M. 西田弘氏写真

第1圖 石山国分遺跡出土軒瓦



第2図 石山国分遺跡瓦出土地点 (註4 b 文献挿図を一部改変、1:5,000)

同範とみられる膳所相模町出土品については、平城宮6235 B 型式とほぼ同様のものとされる。⁽⁶⁾

軒平瓦

K 型式 偏行忍冬唐草文のもので、上外区を珠文、下外区を線鋸歯文で飾る。内区の左右上隅に1珠文を配す。⁽⁷⁾ 藤原宮6646 A と同範。

L 型式 傘型の中心飾りを持ち、細い線状の唐草文が展開する。外区には珠文が施される。

A 型式 飛雲文のもの。

H 型式 4 回反転する唐草文で、外区には大振りの珠文が施される。

J 3 型式 おたまじゃくし状の退化した唐草文が反転しつつ展開する。外区は珠文帯。

O 型式 退化した2葉構成の唐草が3単位、反転せずに展開する。外区は素文。

P 型式 3葉構成の唐草文が3回反転する。下外区との界線は2重。

Q 型式 3回反転唐草文のもの。左3単位の唐草文は2葉構成であるが、拓本では左1単位の唐草文がP型式に似た3葉構成のように見える。下外区との界線は2重。

R 型式 2葉構成の唐草文が3回反転する。下外区との界線は2重。

S 型式 3葉構成の唐草文が4回反転する。外区には珠文が施される。平城宮6691型式の系譜を引くものと考えられる。

このうちセット関係が明らかなものとしては、藤原宮式の複弁8葉蓮華文軒丸瓦L型式と偏行唐草文軒平瓦K型式が組み合う。飛雲文軒丸瓦A型式は飛雲文軒平瓦A型式と対になる。また、堂の上遺跡の発掘調査結果から、単弁12葉蓮華文軒丸瓦K型式と唐草文軒平瓦L型式がセットになることがわかっている。⁽⁸⁾

さて、石山国分遺跡では広い範囲から遺物の出土がみられ、台地先端部の御霊神社境内地(第3地点)から第2調査地までで約550mを測る。この地に想定される瓦葺建物施設としては、『日本紀略』において弘仁11年(820)に近江国分寺に代えられたとされる定額国昌寺、この措置に伴って移転してきたと考えられる平安期の国分尼寺がある。更に当地は、藤原仲麻呂によって天平宝字3年(759)に造営が開始され、天平宝字6年(762)に造営中止となる淳仁朝保良宮の推定地でもある。「石山国分遺跡出土瓦」には、この3施設に関わるものが含まれている可能性が考えられる。

各調査地および採集地点⁽⁹⁾で出土したことが明らかな瓦の種類はつぎのとおりである。

- 第1次調査地 軒丸瓦D型式 軒平瓦H型式⁽¹⁰⁾
- 第2次調査地 軒丸瓦N・D・M・G3型式 軒平瓦P・Q・H型式
- 滋賀総合職業訓練学校校地 軒丸瓦K型式
- 第1地点 軒丸瓦L・K・D・G3型式 軒平瓦L・H・O・J3型式
- 第2・第3地点 軒丸瓦K・A1・D型式⁽¹¹⁾ 軒平瓦K・A型式

まず、当地で出土する瓦のなかで最も古い藤原宮式の軒丸瓦L型式および軒平瓦K型式は台地先端付近の斜面や裾部で採集されており、従来の推定どおり、滋賀職業訓練学校校地に白鳳期創建の国昌寺が存在したものと考えられる。⁽¹²⁾

奈良・平安時代の瓦は、瀬田川対岸に展開する近江国府関連遺跡のものと密接なつながりがある。飛雲文の軒丸瓦A型式・軒平瓦A型式のセットは、近江国庁・堂ノ上遺跡⁽¹³⁾・惣山遺跡⁽¹⁴⁾・国昌寺に移る前の近江国分寺に推定される瀬田廃寺⁽¹⁵⁾において使用されており、軒丸瓦K型式・軒平瓦L型式のセットは堂ノ上遺跡・瀬田廃寺で出土する。軒丸瓦D・G1型式および軒平瓦H型式は、国庁・堂ノ上遺跡⁽¹⁶⁾で見られるものである。⁽¹⁷⁾

このように石山国分遺跡と瀬田の近江国府関連遺跡群には、屋瓦の供給体制に密接な関係があることがわかるけれども、第2次調査地では瀬田地域では出土が認められていない一群の瓦の出土がある。

第2次調査地は大津市国分の台地基部に位置する。昭和37年(1962)に国鉄東海道新幹線敷設に伴って発掘調査が実施され、雨落ち溝様の窪地を伴う礎石建物の一部が見つかっている。建物の主軸方位は、報告書使用方位でN12°Eを測る。遺物には屋瓦・塼のほか、地鎮具として埋納された可能性がある平安時代の須恵器壺、内面箔押の須恵器片、水晶玉、緑釉陶器、鉄釘、青銅製釘等が出土している。⁽¹⁸⁾ここで出土している軒瓦は先に記したとおり、軒丸瓦N・D・M・G3型式、軒平瓦P・Q・H型式のものである。このうち軒丸瓦N型式、軒平瓦P・Q型式については奈良時代のもので、Q型式が瀬田廃寺で出土しているほかは瀬田地域では見られないものであ

る。

軒丸瓦N型式は、平城宮6133型式に類似するもので、大津市錦織から同様のものが出土している。本品は内外縁を分かち圏縁をもち、弁の先端が尖り気味であることから、平城宮6133型式のなかでもA～Cに近いものである。平城宮瓦編年において6133A～C型式は第Ⅳ—1期(天平宝字元年～天平神護2年)(757～766)に位置付けられている。軒丸瓦P・Q型式および、出土地点不詳のR型式はいずれも唐草が3回反転し、下外区との界線が2重になるもので、唐草に差異があるものの似かよった一群のものとしてとらえられる。報文にもあるとおり、軒丸瓦N型式と組み合う可能性が高い。瀬田地域で出土していないものとしては、この他に出土地点不詳の軒丸瓦O型式と軒平瓦S型式がある。軒丸瓦O型式は、平城宮6235B型式とほぼ同様と考えられているもので、大津市膳所相模町からも出土している。なお、相模町出土品に平城宮軒平瓦6691B・6763A型式との相似品がある。4回反転唐草文の軒平瓦S型式は、平城宮6691型式の文様構成に似るものである。平城宮において、6235B型式はⅣ—1期(757～766年)に、6691型式はⅢ—1～Ⅳ—1期(745～766年)に製作されたものと考えられている。

国分台地で奈良時代の瓦を出土する遺跡としては、まず、国昌寺跡が挙げられる。しかし、台地先端部の国昌寺推定地から第2次調査地までの距離や出土瓦の様相の相違から、やはり別の瓦葺施設が存在したとみるべきであろう。国昌寺以外で奈良時代の瓦葺堂舎を備えた施設として当地に想定されるのは、西田・林両氏が指摘するように保良宮がその候補となるであろう。当調査地出土軒瓦に近江国府関連遺跡群においては見られない平城宮系の文様を持つものがあることは、この想定を補強する事実であろう。

次に問題となるのは、平安時代に降る軒瓦の存在である。保良宮は淳仁天皇と孝謙上皇の不和から、天平宝字6年(762)に造営中止となる。第2次調査地出土の軒丸瓦N型式および軒平瓦P・Q型式を保良宮関連施設に関わるものとして考えた場合、平安時代前期以降の軒丸瓦D・M・G3型式、軒平瓦H型式をどのように位置付けるべきであろうか。これらと、8世紀後半代における近江国分寺であったとみられる瀬田廃寺出土瓦の様相を比較すると興味深い事実気付く。すなわち、瀬田廃寺で出土する軒瓦は第2次調査地では出土しておらず、逆に言えば当地出土の平安期軒瓦は瀬田廃寺ではみられないのである。

つまり、瀬田廃寺においては、平安時代前期と推定される複弁8葉蓮華文軒丸瓦(国分分類のF型式)が供給された後、瓦葺堂舎は衰退したものと考えられる。第2次調査地出土の平安期軒瓦はこれに後続するもので、使用堂舎には瀬田廃寺の衰退と有機的に関連する性格が想定できる。弘仁11年に国分寺に代えられたとされる国昌寺は台地先端付近に比定できるのであるから、当地に存在した瓦葺施設としては、国分尼寺が比定されるのである。また、その創建期瓦セットには、軒丸瓦D型式および軒平瓦H型式が候補となり、国昌寺に国分寺格が移されると同時に、尼寺も瀬田から国分の地の移転したものと考えられるのである。ここでも西田氏の所説「或はここ(第2次調査地—筆者註—)に保良宮があったのではないだろうか……(中略)……最初国分僧寺と並んで瀬田にあった国分尼寺が、僧寺の石山移転後何らかの理由で尼寺もこの地に移ることと

なった。その際の尼寺建設地として保良宮の跡地が利用されたのである。²⁰⁴」を追認することとなった。

以上が石山国分遺跡について、現在、筆者の理解するところである。第2次調査地出土瓦の評価においては、部分的な発掘成果をもとにしているため大きな誤謬を犯しているかもしれない。この周辺では、最近、大津市教育委員会によって30年ぶりに発掘調査(第3・4次調査)が実施されている。この調査結果により、曖昧模様の感が拭えなかった石山国分遺跡の具体像が一段と明らかになることであろう。

なお、小文をまとめるにあたって、西田弘先生には瓦出土地点の事実関係等について多くの御教示を頂き、また、膳所相模町出土瓦の拓本コピーおよびこれについてのコメント文を頂いた。最後になってしまいましたが、記して感謝の意を表します。

註

- (1) 享保19年(1734)に膳所藩儒寒川辰清によって完成された『近江輿地志略』の「国分村」項には「国分寺遺址」として礎石の残存することが記されている。また、石山寺座主啓賢(知尼庵)が蒐集した古瓦のなかに当地出土のものがあり、寛政9~11年(1797~1799)、『古瓦譜』にまとめられている。(林 博通「石山寺に蔵する『古瓦譜』およびその古瓦について」『考古学雑誌』第67巻4号 日本考古学会 1982年)
- (2) a. 柴田 実・島田 暁「近江国分寺跡発掘調査概報」(大津市教育委員会 1961年) b. 島田 暁「国分庵寺跡」(『東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』文化財保護委員会・日本国有鉄道 1965年)。以下、前者を第1次調査、後者を第2次調査と称す。
- (3) 西田 弘「国昌寺跡」(『近江の古代寺院』近江の古代寺院刊行会 1989年)
- (4) 林 博通 a. 「近江国分寺に関連する発掘調査」(『新修国分寺の研究』第3巻 吉川弘文館 1991年)、b. 「保良宮小考」(『考古学と文化史』 1994年)
- (5) 辻 広志「下物花摘寺遺跡 5、まとめ」(『昭和53年度滋賀県文化財調査年報』滋賀県教育委員会 1979年)
- (6) 西田 弘「膳所庵寺」(『近江の古代寺院』近江の古代寺院刊行会 1989年)
- (7) 西田 弘「近江の古瓦 I 総説」(『近江の文化財教室』(財)滋賀県文化財保護協会 1982年) 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所基準資料Ⅳ 瓦編4』(1977年)
- (8) 林 博通・葛野泰樹「堂ノ上遺跡調査報告Ⅱ」(『昭和50年度滋賀県文化財調査年報』滋賀県教育委員会 1977年)
- (9) 瓦出土地点の呼称については註(4)b林論文にならう。ただ、林氏が第2地点とされた範囲については、この付近で主に採集されているのが、氏の表示する第2地点と第3地点の中間地点であり、瓦の散布状況が第3地点と連続するとみられるので、ここでは第2・第3地点として一括することにする。
- (10) このほかに近江国庁軒平瓦D型式と思われるものの小片がある。(註(2)a文献)
- (11) 既報告に無い第2・第3地点での軒丸瓦K・A1・D型式は筆者採集。
- (12) 古瓦採集第1地点と第3地点の間の台地南斜面にも、かつて多量の瓦埴類の散布がみられた。
- (13) 水野正好ほか『滋賀県文化財調査報告書第6冊 史跡近江国衙跡発掘調査報告』(滋賀県教育委員会 1977年)
- (14) 註(8)文献。林 博通「瀬田堂ノ上遺跡調査報告」(『昭和48年度滋賀県文化財調査年報』滋賀県教育委員会 1975年)
- (15) 丸山竜平ほか『史跡近江国衙跡調査概要』(滋賀県教育委員会・財)滋賀県文化財保護協会 1978年)
- (16) 肥後和男「瀬田庵寺跡」(『滋賀県史蹟調査報告』第5冊 滋賀県 1933年) 杉山信三ほか「瀬田庵寺発掘調査報告」(『滋賀県史蹟調査報告』第12冊 滋賀県教育委員会 1961年)

(17) 瀬田地域以外からも、大津市滋賀里伝崇福寺跡から軒丸瓦D・M・G3型式が、同南志賀南滋賀町麻寺から軒丸瓦D・M・G1・G3型式および軒平瓦H型式が、同錦織において軒丸瓦N型式が出土している。また、滋賀里長尾瓦窯では軒丸瓦A1・D型式、軒平瓦H型式のものが瓦窯の構築材として使用されている。(西田弘「近江の古瓦Ⅵ 大津1」・「近江の古瓦Ⅹ 大津3」『近江の文化財教室2』(財)滋賀県文化財保護協会 1990年)

(18) 註(2)文献b

(19) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告XⅢ』(1991年)

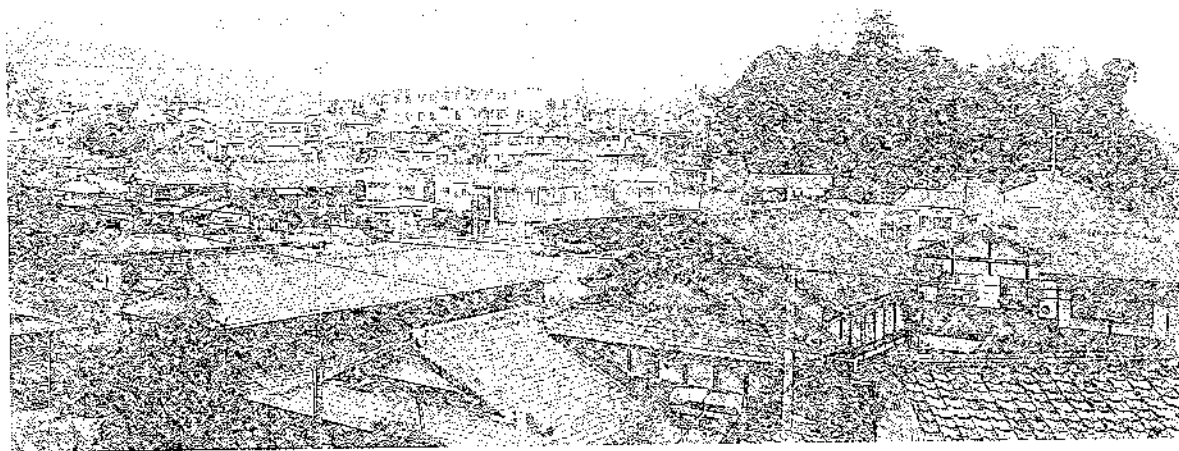
(20) 西田 弘 註(6)文献。同氏「大津市膳所の一廃寺趾出土古瓦について」(『上代文化』第21輯 国学院大学考古学会 1951年)

(21) 註(19)文献

(22) 註(3)文献および註(4)b文献。ただし、保良宮が石山市街地ではなく、国分台地のどこかに存在したものである。

(23) 軒丸瓦D型式・軒平瓦H型式をはじめとして、平安時代前期に瓦を生産している南郷田中瓦窯については、国分寺格移転に伴う、国昌寺の整備および石山国分尼寺の建立を契機として操業が始まる瓦窯と位置づけられよう。(清水ひかる「南郷田中古墳および南郷田中瓦窯跡」『錦織・南滋賀遺跡発掘調査概要Ⅳ』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1994年)

(24) 註(3)文献



石山国分遺跡遠景 (南東から)

編 集 後 記

この冬は、久しぶりに雪の多い年となり、外での調査では寒さに堪える日々を過ごされたことと思います。今年には当協会設立25周年にあたり、日頃の調査や普及活動に加え、安土城考古博物館で、企画展示『いにしへの渡りびと—近江の渡来文化—』や、それと関連したシンポジウムを実施してまいりました。本紀要も25周年ということで、例年にくらべて多くの論考が集まりました。つきましては、多くの方からのご叱正とご指導を賜れば幸いです。 平成8年3月

平成8年3月

紀 要 第 9 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(0775)48-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社
大津市札の辻4-20
Tel(0775)23-2580 Fax(0775)24-6668